Case Study 04

生活クラブ風の村　きなりの街すわだ……千葉県市川市

地域で暮らすための応援拠点

4年前、一人暮らしの年金生活者や生活困窮者のための住宅型有料老人ホーム「生活クラブ風の村　きなりの街すわだ」が市川市須和田にオープンした。

市川真間駅から県道を歩いて15分。小さな看板を目印に路地を曲がると、新しいアパートや廃屋、民家の混在する静かな住宅街がある。まず目に付いたのが、カフェとメニューの看板。カフェの前には自転車やバイクが並び、2階にはカーテンが引かれた大きな窓が六つ。左端の部屋のカーテンが揺れている。

入口の通路は玄関まで両側に手摺りがあって、歩いても車椅子でも安全に通れるよう、バリアフリーになっている。

1階の部屋の前には、生活クラブのロゴが入った白い車が2台。この木造2階建ての有料老人ホーム「きなりの街すわだ」に、12人の住人が、介護や見守り支援を受けながら暮らしている。

この住宅がなぜ建てられたのか。ここを終の棲家として暮らす人たちはどんな暮らしをしているのか。所長の長崎直子さんにお話を聞いた。

長崎さんは「きなりの街すわだ」の名前の由来について話してくれた。

「『きなり』とは、ありのままでという意味です。『街』には、こういう住宅がいくつか増えて、ありのままに暮らせる街になってほしいとの思いが込められています」

きなりの街すわだの外観。手前に入居者の個室が入る。奥の1階は、カフェ・地域交流スペース。

生活困窮者や路上生活者の終の棲家を求めて

もともとは「NPO法人ガンバの会」が、生活困窮者や路上生活者の自立支援の一環として、安いアパートを紹介し、路上生活からの脱却を支援してきた。しかし、病気になったり、介護が必要になったりして、一人暮らしが困難になるケースも少なからず出てきた。市川市には低所得者が入居できるケア付き住宅がなかったため、泣く泣く山の中の施設や県外の安い施設に送らざるを得なかった。こうしたことから、「住み慣れた地で、医療や介護が必要になっても安心して暮らし続け、最期を迎えられる共同住宅がほしい。ないなら作ろう」と。

しかし、なかなか思い通りには進まない。ガンバの会の活動は、これまでホームレス支